

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 7 日現在

機関番号：12606

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2014～2015

課題番号：26884020

研究課題名(和文) ニュルンベルク、ザンクト・ロレンツ聖堂の空間分析 ネット・ヴォールトと彫刻の関係

研究課題名(英文) Space Analysis of St. Lawrence's Church in Nurnberg : the Relationship Between Architecture and Sculpture

研究代表者

岩谷 秋美 (IWAYA, Akimi)

東京藝術大学・美術学部・助手

研究者番号：10735541

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、ゴシック後期における建築と彫刻の関係を考察した。殊に注目したのは、ドイツのニュルンベルクにある、ザンクト・ロレンツ聖堂である。その内陣に、幾何学形態に基づくリブ・ヴォールトが架けられ、その下には、15世紀末に発展したロザリオ信仰を背景とする、ファイト・シュトースによる木彫《天使の挨拶》が吊り下げられている。本聖堂では、こうした建築的・彫刻的諸要素が、図像・造形の上で総合的に作用しあい、聖堂空間を演出していることがわかった。

研究成果の概要(英文)：In the present research project, the relationship between the Late Gothic architecture and its sculpture was studied, focusing on St. Lawrence's Church in Nurnberg, Germany. At this church, the ribs of the choir make geometrical patterns and from the center of the vault, the wood carving "Englischer Gruss; (the Annunciation)" by Veit Stoss; is suspended, which is offered to the Rosary Devotion of the late 15th century. These architectural and sculptural elements in this choir work together to produce the sacred space iconographically and formally.

研究分野：美学・美術史

キーワード：ゴシック ドイツ 建築 リブ・ヴォールト ファイト・シュトース マリア図像 ロザリオの聖母

1. 研究開始当初の背景

ドイツ後期ゴシックの聖堂建築は、多彩な装飾形態を発展させた。殊に注目されるのは、リブ・ヴォールト（肋骨穹窿天井）である。リブは本来、ヴォールト（穹窿天井）を支えるという、構造的役割を担う。ところがゴシック後期のドイツ語圏では、そのリブが、あたかも構造的役割を放棄したかのように、直線や曲線を駆使した多彩な形態を発展させた。その形態は実にさまざまであり、そこに統一的な傾向を見出すことは困難で、百花繚乱の感がある。こうした状況に対して、先行研究は、リブ・ヴォールトの形態分類や、その系譜の解明、および、幾何学的な分析に注目してきたが、しかし概して、リブ・ヴォールトを、単に表層的な装飾と捉える傾向にあった。

なるほどドイツ後期ゴシック建築におけるリブ・ヴォールトは、過度なまでにその装飾性を発展させた。しかしそれは、果たして本当に、建築表面を飾るだけの装飾要素に過ぎなかったののだろうか。こうした疑問に答えるための手掛かりを提供するのが、同時代の彫刻や絵画といった、再現的な芸術だと考えられる。ゴシック後期のドイツ語圏における彫刻や絵画、そして版画では、線状要素を駆使した、表現主義的な芸術が発達しており、その表現性は、リブ・ヴォールトとも類似している。したがって、再現芸術との比較分析を通じて、リブ・ヴォールトに、単なる装飾に留まらない、いわば、彫刻や絵画に準ずるような表象性や象徴性を見出すことができるのではないだろうか。

たとえば、本研究で注目するニュルンベルクのザンクト・ロレンツ聖堂は、ゴシックからルネサンスへの、いわゆる「移行期」のドイツを代表する建築である（挿図参照）。その内陣造営には、南ドイツの主たる聖堂を建設した棟梁たちが従事した。また、彫刻などの内装に関しても、やはり同時代を代表する彫刻家ファイト・シュトースやアダム・クラフトらが制作に携わっていた。こうして完成した聖堂を観察したならば、そこでは統一的な空間が形成されていることが明らかであり、さればこそ、建築と彫刻が、総合的な意図の下に創出されたという可能性に思い至るのである。

そもそも当時の芸術家たちの活動を観察すると、建築や彫刻、絵画といった芸術分野の垣根を超えた交流が認められ、それは、とりわけ中世後期になるに従い、活発化していった。こうした状況を背景として、特に版画や見本帳、設計図を介することで、芸術分野間において、理念やコンセプトを共有化していたというのは、十分に考えられることである。

2. 研究の目的

本研究は、ゴシック末期に建設されたニュルンベルクのザンクト・ロレンツ聖堂の内陣



【図1】ファイト・シュトース作《天使の挨拶》
ニュルンベルク、ザンクト・ロレンツ聖堂、内陣



【図2】同

を手掛かりとして、建築的要素と彫刻要素の関係性を考察するものである。上述のとおり、ドイツ後期ゴシックの聖堂建築で発展したリブ・ヴォールトを、先行研究では、表層的な装飾と見なす傾向にあった。聖堂内に設置された彫刻についても、建築要素との関係が積極的に考察されることはなかった。以上の状況に対して本研究では、当時の芸術家たち

が、芸術分野を超えてアイデアを交換していたという推察を出発点として、主に次のふたつの可能性を検討した。第一に、リブ・ヴォールトという建築要素が、絵画や彫刻に準ずる表象性や図像的機能を担っていた可能性である。第二に、聖堂内装としての彫刻が、いわば総合的な空間芸術を構成するひとつの要素として、つまり建築要素との関係性が考慮された上で、コンセプトや造形が決定されていた可能性である。以上のふたつの課題を解決すべく、本研究では、ニュルンベルクのザンクト・ロレンツ聖堂における、リブ・ヴォールトと彫刻の関係性を考察した。

なお、ドイツ後期ゴシックの建築と彫刻の関係性を考察するにあたり、ニュルンベルクのザンクト・ロレンツ聖堂を対象に選定した理由とは、第一に、上述のとおり、本聖堂の造営には後期ゴシックを代表する棟梁と彫刻家関わっており、また第二に、当時の現状が比較的良好に残されている点に加え、第三に、この聖堂が、ニュルンベルクという、ドイツ文化の中心地に位置することから、本研究が重視する、芸術家の交流や、芸術の各分野の影響関係を把握するのに適した環境にあると判断されたためである。

3. 研究の方法

本研究では、便宜上、課題を以下の4つのテーマに分割し、それぞれ調査・研究を進めた上で、総合的な考察を行った。

(1) リブ・ヴォールト研究：現地におけるゴシック建築の調査を主軸とした。現地では写真撮影とともに、内装と建築の関係性についても詳細な調査を行い、あわせて図面などの資料も収集した。写真、図面、その他の調査結果は、データベースとしてまとめた。

(2) 祭壇彫刻研究：現地でのゴシック祭壇調査を主軸とした。現地では細部の造形に注目した写真撮影を行うとともに、設置されている聖堂建築や、そのほかの内装との関係性についても調査を行った。あわせて、それぞれが制作された年代や背景、移設等の変更が生じた事情等にも留意しつつ、考察を加えた。

(3) マリア図像研究：本研究での考察対象である、ニュルンベルクのザンクト・ロレンツ聖堂内陣に設置されたファイト・シュトース作《天使の挨拶》(挿図参照)は、聖母マリア信仰に基づくロザリオ信仰を背景として制作されたものである。ゆえに、マリア図像を重点的に調査する必要がある。そこで、ウィーンのアムベルティナー版画素描館、ミュンヘンの国立版画素描コレクション、ロンドンのウォーバーグ研究所等において、「受胎告知」図像をはじめとするマリア図像が用いられた絵画・彫刻・版画・素描作例の収集を行った。

(4) 注文主・施主研究：聖堂建設の経緯や、典礼の状況を把握すべく、ザンクト・ロレンツ聖堂の造営プロセスや、彫刻などの内装が寄進された経緯を調査した。殊に、《天使の

挨拶》を寄進したトゥッヒャー家のアントン二世による寄進の状況を伝える史料『家政書』の研究を重点的に行った。

(5) 以上の研究課題を考察するに当たり、2013年9月、2014年3月、同年7~8月に、ドイツ・オーストリア・フランス・イギリスにて、総計三カ月程度の現地調査を行った。

4. 研究成果

本研究は、ニュルンベルクのザンクト・ロレンツ聖堂内陣に注目し、ドイツ後期ゴシックにおける、リブ・ヴォールトと彫刻の関係性を考察するものである。殊に注目したのは、内陣リブ・ヴォールトの中央に吊り下げられた、ファイト・シュトース作《天使の挨拶》である(挿図参照)。以下では、まず(1)、(2)にて基本事項を確認した上で、(3)以降にて、本研究を通して得ることができた成果を報告したい。

(1) ザンクト・ロレンツ聖堂

帝国自由都市ニュルンベルクは、1356年、皇帝カール四世が公布した金印勅書によって帝国議会開催地としても定められた、政治的に重要な場所であり、あわせて、特にルネサンス期には、アルブレヒト・デューラーをはじめとする芸術家たちの活動を通じて、ドイツ文化を牽引した都市である。現在みられるザンクト・ロレンツ聖堂は、およそふたつの時代の建造物から構成されている。先に建設されたのは、外陣である。その造営は、1250年頃から1390年まで行われた。ザンクト・ロレンツ聖堂はニュルンベルクの南部に位置するが、ちょうどこの時期に南部が発展を遂げたことから、ザンクト・ロレンツ聖堂は多くの有力市民から寄進を受けるようになった。

外陣が完成してから半世紀後の1439年、本研究が注目する内陣の建設が始まる。造営に関わった主な棟梁としては、コンラート・ハインツェルマン、コンラート・ロリツァー、その息子マテウス・ロリツァー、ヤーコプ・グリムらが挙げられる。内陣が完成したのは、1477年のことであった。完成後も引き続き、ニュルンベルクの富裕な市民たちは、同時代を代表する彫刻家に彫刻を制作させ、これを本聖堂へ寄進した。たとえば、アダム・クラフトが手掛けた聖体顕示塔は、ニュルンベルクの商人ハンス・イムホフが寄進したものである。

(2) シュトース作《天使の挨拶》

1518年、内陣中央に設置されたのが、ファイト・シュトース作《天使の挨拶》である。この前年、ニュルンベルクの有力者アントン・トゥッヒャー二世が本作を注文し、翌1518年7月17日、ザンクト・ロレンツ聖堂の内陣中央にこれを吊るしたことが、同家の『家政書』に書き残されている。以後、《天使の挨拶》は、わずかな期間を例外として、

現在に至るまで、設置場所が変更されていない。

《天使の挨拶》には、特異な形状が採用された。本作の枠を形成するのが、バラとメダイオンを連ねた縦長楕円状のリングである。リングの頂点には、父なる神が、その内側には、聖母マリアと大天使ガブリエルが立ち並び、その周囲を10人の天使たちが舞い踊る。マリア像は、等身大よりも大きい218 cmであり、作品全体の高さは515 cmにおよぶ。シナノキを素材とし、金をはじめとする鮮やかな彩色が施された本作が、内陣ヴォールトから吊り下げられた鉄棒に固定され、つまりは空中に設置されることによって、内陣で行われる祈祷の対象とされた訳である。

(3) 注文主・施主

注文主・施主と関わる史料をめぐり、特に注目したのは、ニュルンベルクの有力者アントン・トゥッヒャー二世が、シュトースの《天使の挨拶》を発注した際の出納記録である（底本：ヴィルヘルム・ローゼ編『アントン・トゥッヒャーの家政書』および『特別勘定書』1877年、144-146頁、第136a葉）。トゥッヒャー家は、長年にわたって市政に携わり、また同時に、イタリアやフランス、スペインなどとの交易を営んでいた、ニュルンベルクの名家である。アントン二世自身も、要人ともいえる存在であった。アントン二世は、その生涯を通して少なからぬ寄進を行ったが、《天使の挨拶》は、彼が寄進した芸術品の中で最も注目される作品のひとつである。

トゥッヒャー家の『家政書』とともに、1590年の『シュタルク年代記』や、現在ではトゥッヒャー城に所蔵されている、17世紀に描写された2枚のスケッチなどの絵画史料をあわせると、《天使の挨拶》の制作から設置、さらには、その後の内装変更に至るまでの概要をうかがい知ることができ、トゥッヒャー家が《天使の挨拶》およびザンクト・ロレンツ聖堂と深く関わっていた具体的な状況が明らかとなった。

(4) リブ・ヴォールト

《天使の挨拶》を天蓋のごとく覆うのが、内陣のリブ・ヴォールトである。それは、1400年前後に観察されていた、菱形を基本形態とする、比較的均質な網状ヴォールトではなく、菱形と星型八角形を組み合わせた、複雑で装飾的なものであった（挿図参照）。建築デザインに関連する図面等の史料は現存しないため、これを建設した棟梁の意図を明らかにするためには、造形分析が重要となる。本研究では、造形と図像の二点から考察した。

まずは、造形についてである。実は本聖堂の建築要素に関しては、同時代の彫刻や絵画と同じ様式だとの指摘がある〔註1〕。たとえば15世紀前半に建設されたザルツブルクのフランシスコ会修道院聖堂の内陣では、柱が聖杯のように膨らみながら柔らかに広がり、

そこから伸びるリブ・ヴォールトが、均質に編み込まれることで静謐な空間作用をもたらす。これは、同時代の写本や板絵に観察される柔軟様式と比較されるものであった。これとは対照的に、ニュルンベルクのザンクト・ロレンツ聖堂内陣では、たとえばコンラート・ヴィッツの絵画にて観察されるような、鋭い稜線が折れ曲がる衣文線とも類似した、「角ばった」様式の傾向が認められるのである。

次に、図像についてである。聖書の記述をたどると、そもそも聖堂の原型とは、アブラハムが神の啓示に従い設けた至聖所としての「幕屋」であり、それは天上に例えられることもある。したがって、至聖所である聖堂空間が、「幕屋」、ひいては、『黙示録』でいうところの天上のエルサレムのイメージと重ねられることは、決して稀ではない。あわせて、殊にリブ・ヴォールトが有機的な形態を発展させたドイツ後期ゴシックの建築においては、その空間が「天上の庭園」に例えられることもあった。これは、(6)で考察する、《天使の挨拶》の背景となる「ロザリオの聖母」図像のイメージとも重複するものなのである。

なお、リブ・ヴォールトについては、現地調査を行った結果として、チロルのシュヴァーツやオーバーエスターライヒのケーニヒスヴィーゼンにおける珍しい作例を筆頭として、オーストリア、ドイツのバイエルン州、バーデン＝ヴュルテンベルク州を中心とする、ドイツ後期ゴシックのリブ・ヴォールトの多くの作例を収集・考察できたことを、特に記しておきたい。

(5) 彫刻・絵画・建築の関係

リブ・ヴォールトという建築的要素と、聖堂内に設置された彫刻とが、果たしてどのような関係下に置かれているかという問題に対して、これを解決するための手掛かりを得るべく、本研究では、ドナウ派に注目した。ドナウ派とは、アルブレヒト・アルトドルファーをはじめとする、1500年前後のドナウ流域で活動した芸術家たちを指す概念である。ドナウ派を基軸として、ドイツにおけるゴシックからルネサンスへの移行期の絵画や彫刻を検討すると、そこには、芸術分野を超越した、同一の傾向というものが認められる。たとえばパッサウを拠点として活躍したヴォルフ・フーバーと逸名の彫刻家IPは、共同制作も行っていた。さらに、とりわけ彫刻家IPについては、浮彫作品において、それが風景であれ肖像であれ、絵画や版画とほとんど同等のものとして制作していた点が指摘されている〔註2〕。また画家アルトドルファーと彫刻家ハンス・ラインベルガーは、殊に衣文表現などにおいて、共通の様式傾向にあることも指摘されている〔註3〕。

ドイツ後期ゴシックの聖堂では、その内部空間に架けられたヴォールトが、複雑な形態

のリブで飾られており、内陣障壁や聖体安置塔などといった内装部分も同様に有機的な装飾が施され、これが、ステンドグラスから差し込む陽光と、建築本体がもたらす陰影の効果と相まって、幻想的な世界を作り出していた。当時の聖堂空間に観察される線や光の効果、この時代の芸術における美的志向と合致したものであるということは、聖堂内部の神秘的効果が、同時代の画家・彫刻家たちにとって格好のモチーフとなっていたことから明らかである。つまり、この時代の表現主義ともいえる表現性は、絵画と彫刻だけでなく、これらの本来の設置場所である建築も含めた、総合的なものであったことを示す、ひとつの証左であるといえよう。

(6) マリア図像とロザリオ信仰

トゥッヒャー家が寄進した、シュトースの《天使の挨拶》は、ロザリオ信仰を背景として制作されたと考えられる。ロザリオ信仰は、15世紀後半から広く普及したものであり、1474年にはケルンのドミニコ会士ヤーコプ・シュプレンガーにより、皇帝フリードリヒ三世の下、最初のロザリオ兄弟会が設立された。ロザリオ信仰の広がりとともに、15世紀末以降、これにまつわる版画が多数流通し、祭壇も作られた。こうした作品に使用されたのが、いわゆる「ロザリオの聖母」図像である。「ロザリオの聖母」図像は、マリア像とロザリオを中心なモチーフとして、およそ10種類程度のヴァリエーションをもつ。ところが《天使の挨拶》は、ほかに類例のない、唯一の作例に位置付けられている。その理由とは、本作が、「受胎告知」を中心モチーフとするためである。

以上の状況を踏まえ、本研究では、「ロザリオの聖母」と「受胎告知」というふたつの観点から、とりわけ同時代のロザリオ信仰を背景とする「ロザリオの聖母」祭壇に重点をおきつつ、《天使の挨拶》の特異性と創意を検討した。主要な比較対象としたのは、シュトース工房が手掛けた《ロザリオ祭壇》(ニュルンベルク、聖母聖堂に由来)である。その画面上方では、巨大なロザリオが正円を描き、その中では、十字架を中心として、父なる神や聖母子、様々な聖人が4段にわたって配置される。ロザリオの下では、復活した死者たちが、あるいは天上へ迎えられ、あるいは地獄へ落される。死者とロザリオの間に位置するのが、キリストとマリア、洗礼者ヨハネから構成される「デイシス」である。祭壇周囲の枠に目を向けると、そこには創世記やマリア伝、受難伝の場面が、それぞれ矩形の枠内に収められ、並んでいる。このようにシュトース工房の《ロザリオ祭壇》では、ロザリオ信仰について説明的な描写がなされているといえる。

あわせて比較したいのが、ニュルンベルクのドミニコ会修道院ザンクト・マリア聖堂に由来する、もうひとつの《ロザリオ祭壇》で

ある。そこでは、祭壇平日面に「受胎告知」が、祭壇祝日面に木彫の「ロザリオの聖母」とパネルの「祈りを捧げる信者たち」が描写される。後者の像が、ロザリオ信仰の代弁者であることは、いうまでもない。総じて本作品では、祈祷や信仰を説明的に描写していたシュトース工房の《ロザリオ祭壇》と比べて、祈りのイメージを直観的に伝えるものだといえる。

結論として《天使の挨拶》は、上述した二作例の特質を統合させた作品だといえる。すなわち「受胎告知」というロザリオ信仰の根本的な図像を中心に据えることで、その信仰の意味を説明しつつ、また同時に、厳格な構図の中に配置されたガブリエルとマリアから構築されるイメージは、祈祷の対象としても、直観的に理解されるものである。あわせて、本作の「受胎告知」に描写された天使と天体モチーフを通じて、本作品の天上的なイメージが高められるのである。

(7) 総括

ファイト・シュトース作《天使の挨拶》は、ロザリオ信仰を背景として制作された作品である。それは、いわゆる「ロザリオの聖母」図像とは異なり、「受胎告知」を中心モチーフとする点で特異である。しかしその特異性により、本作品は、ロザリオ信仰を説明的に表現するとともに、祈祷のイメージを直観的に理解させることになるのである。

以上の考察に基づき、《天使の挨拶》は、ヴォールト直下に吊り下げられるという設置場所を考慮し、この「設置機会」を、造形的にも、図像的にも、積極的に活用して制作されたものだといえる。《天使の挨拶》の祈祷対象としての性格は、内陣のリブ・ヴォールトを背景とすることによって、その祝祭性をいっそう増すことになる。また同時に、《天使の挨拶》が象徴する天上世界のイメージが、リブ・ヴォールトにも投影される。このリブ・ヴォールトは、造形的には同時代の絵画や彫刻と同じ傾向を有するものであり、また図像的には、天上世界の再現を意図したものであった。こうしてニュルンベルクのザンクト・ロレンツにおける内陣空間は、リブ・ヴォールトという建築要素と、シュトースが手掛けた彫刻《天使の挨拶》とが協同して、聖なる空間が創出されることになるのである。

本研究では、ドイツ後期ゴシックの聖堂建築と彫刻の関係性について検討した結果、両者が総合的に、聖なる空間の創出に携わっているということを明らかにした。以上の研究成果を総括したものを、目下論文としてまとめており、2016年3月、および2017年度内に刊行する予定である。

註

[註1] E. Petrasch: „Weicher“ und „Eckiger“ Stil in der deutschen spätgotischen Architektur, in:

Zeitschrift für Kunstgeschichte, XIV, 1951, S. 7-31.

〔註2〕S. Jaeger: Wolf Huber und Meister IP, in: S. Roller et. al. (Hrsg.): *Fantastische Welten*, München 2014, S. 35-39, hier S. 38.

〔註3〕M. Weniger: Altdorfer und Leinberger, in: S. Roller et. al. (Hrsg.): *Fantastische Welten*, München 2014, S. 27-33, hier S. 31.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

①岩谷秋美「ドイツ・ルネサンスにおける皇帝権の表象 版画《皇帝マクシミリアン一世の凱旋行進》の機能と受容」『言語文化』33号、明治学院大学言語文化研究所、2016年、47-64頁、査読無し。

②岩谷秋美「《天使の挨拶》に関するファイト・シュトースへの支払記録 『アントン・トゥッヒャーの家政書』第136a葉および「特別勘定書」より」『Aspects of Problems in Western Art History (東京藝術大学西洋美術史研究室紀要)』13号、2016年、157-159頁、査読無し。

③岩谷秋美「ハンス・マカルト作《皇帝カール五世のアントウェルペン入城》における“歴史主義” アルブレヒト・デューラー作《皇帝マクシミリアン一世の凱旋車》との関係」『Aspects of Problems in Western Art History (東京藝術大学西洋美術史研究室紀要)』12号、2015年、41-50頁、査読無し。

〔学会発表〕(計1件)

①岩谷秋美『ドイツ・ルネサンスにおける皇帝権の表象 版画《皇帝マクシミリアン一世の凱旋行進》の機能と受容』明治学院大学言語文化研究所・文学部芸術学科・ドイツ語圏美術史研究連絡網主催シンポジウム「創造・伝達・記憶の場としての版画」(於明治学院大学)、2015年。

〔図書〕(計1件)

①岩谷秋美『ウィーンのシュテファン大聖堂 後期ゴシックにおけるハプスブルク家の聖堂造営理念』中央公論出版、2016年度刊行予定。

〔その他〕

①岩谷秋美「幻想の世界：アルブレヒト・アルトドルファーと1500年の芸術における表現性」(展覧会評)『Aspects of Problems in Western Art History (東京藝術大学西

洋美術史研究室紀要)』13号、2016年、153-156頁、査読無し。

②岩谷秋美「東京藝術大学附属図書館所蔵・中世写本ファクシミリ研究」における研究報告「《皇帝カール五世の祈禱書》(Wien, ÖNB, Cod. Vind. 1859)」『Aspects of Problems in Western Art History (東京藝術大学西洋美術史研究室紀要)』13号、2016年、147-152頁、査読無し。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岩谷 秋美 (IWAYA, Akimi)

東京藝術大学・美術学部・助手

研究者番号：10735541